

京都新聞賞

だれもが幸せに暮らせる社会へ

京都市立修学院第二小学校 六年

猪口 いのぐち

碧乃 たまの

私には五才上の兄がいます。兄は自閉症で重度の知的障害があります。兄は両親にかわいがられていて、私も兄のことは好きです。兄は表情が豊かで私にも優しいです。

でも、兄は外へ出ると、大声を出したり、急に怒り出したりすることがあります。そんな時、周りの人がジロジロ見てきて、はずかしくなることがあります。例えば、散歩をしている時に兄が大声を出しました。そこに同級生が通り、「大声を出さないでよ。」とイヤな思いをしたことがあります。他にも、兄が「おかあさんといっしょ」や「ピタゴラスイッチ」などの幼児向けの番組をずっと見ていて、私がテレビを見ることができないというマイナスなところがあります。

しかし、兄にはいいところもたくさんあります。例えば、兄はスクールバスで支えん学校に通っているのですが、私が「いつてらっしゃい。」と言つと、「なぜか「ねんね。」と言います。私は、その言い方や言うタイミングなどがとてもかわいらしいと思つてます。「ねんね」という言葉は、兄がかぜをひいた時に母がなげるために「ねんね。」と教えたのですが、今はあいさつのような言葉になつていきます。兄は、文では話せないけれど、言える単語が毎年増えてきました。他にも、兄は読書家で、いつも幼児向けの本を見ているのですが、最近、私の本のカバーをはずし、表紙の絵を見ることがブームになつてます。その絵を見て、単語を言う時があるので、「かっこいなあ。」と感心しています。やはり最近、おもちゃのことがありました。それは、兄が私の部屋から勝手に、麦わらぼうしをかぶっていたことです。私は、おかしく笑つてしまいました。

このように、兄にはおもしろいところやかしいところがたくさんあります。でも、残念ながら兄のような障害者を差別したり、暴力をふるったりする人がいます。私は、そのようなニュースを聞くたびに悲しい気持ちになります。「もし兄にそんなひどいことが起こったら…。」と考えると、不安になることがよくあります。幸い、兄のまわりには優しい人がたくさんいて、兄は毎日楽しそうで、私はうれしいです。

兄のような障害のある人をふくめ、だれもが幸せに暮らせる社会になつたらいいなと私は思います。そんな社会にするには、障害をもつ人のことを知つて、理解してもらえばいいと思います。兄だけではなく、障害がある人みんなに個性があつて、優しかったり、おもしろかったりすると思います。そんな個性を身近に感じることで、障害のある人もない人もみんな仲間だと思えるようになるのではないかと思います。

そうしたら、障害のある人に対する差別やへん見が減り、障害のある人をきずつける犯罪がなくなつていくと思います。そして、いつまでも兄が差別をされることなく、兄らしくいきいきと暮らしていくことができれば私も一安心です。





た。私は、とても安心した。何度も礼を言って受け取り、再び家に帰った。

私の地域の人は、いつも子供たちのことを見てくださっていて、ときには助けてくださる。こんなにもあたたかい人々がいる中で、犯罪ができるだろうか。私だったら、たとえどんなに自分を取り巻く環境が悪かったとしても、犯罪をしようと思わないし、きつとで
きない。

このまちを守るために、私は、あのルーティーンを続けたい。挨拶をすることは、お互いの気持ちをあたたかくし、地域のつながりを深めるだけではない。地域の人を守ってもらおうきっかけにもなる。地域の人に見守られていたら、非行なんかできないし、そんなことをする前に、手を差し伸べてくれるだろう。

一人一人の小さな行動や意思が、地域を変えることができる。みなさんは、自分のまちを守るために何をしますか？何ができますか？

